

2018年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
さし交はす枝の先まで春隣
洗濯も掃除もしたくなる三日
海を恋ふ音たて乾きゆく若布
金縷梅のいぢけ加減をひからせる
剪定を尽くしすっからかんの枝

藤沢 藤田 富子
黄落の池にきらめき散らしけり
いにしへの名刹の跡落葉降る
凧わたる海一望の冬日和
眼科医の俳句談義や十二月
短日の刻の過ぎゆく探しもの

八王子 石井 蓉子
行商の声の届きしも柚湯かな
明日冬至店の角占めゆず売り場
通院を終へそれよりの年用意
作業所につけば声来る霜の朝
クリスマスサンタ待ちたる早寝かな

町田 小森 まさひこ
水仙の咲きて日本海荒ぶ
雪壁に登校路とせる小学生
大雪を靴に語らせ集ひたる
薄氷を進みゆく日の刻々と
雪富士のダイヤモンドの夕日かな

2018年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
白き根を青く匂はせ芹を積む
椽の芽の光り大きくほぐれ来し
猫の子の興味深々なる眼
七色に匂ひ十色に木の芽吹く
ためらうてとまどうて初桜かな

藤沢 藤田 富子
みどり児のおすわり出来て春そこに
恙なきことのみ願ひ春を待つ
凍解の道踏みしめて歩をはこぶ
尻もちの人を笑へぬ雪の街
こつこつと働きくれし針納む

八王子 石井 蓉子
懸命に生きてる吾に梅開く
公園の子供は無邪気春夕焼
日脚伸ぶ工賃得たる帰り道
春の香を匂ひ立たせる光かな
夕暮れや春待つ神社静かなり

町田 小森 まさひこ
山肌を隠し立山螢烏賊
大海の香も煙らせて目刺焼く
春雨や乳房まさぐる像の立つ
白き山に空青くして花辛夷
大ばさみ操り羊毛を刈られ

2018年5～6月掲載分

習志野 大慈彌 爽子
雲の道風の道なる朴の花
豆の花咲かせラジオを連れとして
声の色変へてささめく百千鳥
落日の影くれなゐに雪解富士
茅花流しに遠き世を引き寄する

藤沢 藤田 富子
笈落つ水の奏でる春のうた
春寒の池底に鯉のみじろがず
友ひとり去りふたり病み春憂ふ
咲き初むる花に無慈悲な雨しとど
春の浜芥のこして潮の引く

八王子 石井 蓉子
まんじゅう屋そこが仕事場藤の花
春の日や洗濯物は日の匂ひ
春風やどこもかしこも笑ってる
春は良しつくしたんぽぼすみれ草
帰り道陽射しは強し矢車草

町田 小森 まさひこ
荒れ狂うことも下町三社祭
三社祭雷門を埋め尽くす
激しきは女神輿に三社祭
東京の田植の舞や三社祭
浅草に季節呼び込む祭りかな

小林一茶
雀の子そこのけそこのけお馬が通る
やせ蛙まけるな一茶これにあり
鳴く猫に赤ん目をして手まりかな
われと来て遊べや親のない雀
夕月や鍋の中にて鳴く田螺

2018年7～8月掲載分

習志野 大慈彌 爽子
噴水の風に挑んでゐる乱れ
汗を尽くして残りたる悔いすこし
朝顔の色風に破れ日にやつれ
泣けなくてつまくれみに手をのばす
六遠と背中合はせにゐる炎暑

藤沢 藤田 富子
雛罌粟(ひなげし)の花びら風に逆らはず
花水木空を明く占めてをり
薔薇園のばらに埋もれて香に酔ひぬ
鎖樋光りて露の雫かな
揚花火見ゆる角度に橋渡る

八王子 石井 蓉子
向日葵の咲いてる下でじゃあまたね
合歓の花目印にして待ち合わせ
夏至の夜の夜更かし決めてみたものの
大空の一点見てる桜桃忌
梅雨寒し作業所の道やや遠く

町田 小森 まさひこ
渴き切る大地の色や松葉菊
河原へとせり出す床や夏料理
越平野埋めつくすせし青田かな
俳聖の登りし寺や雲の峰
気取らずに咲いて水引の花

夏目漱石
泳ぎ上り河童驚く暑かな
雷の囀にのりすぎて落にけり
蝙蝠や賊の酒呑む古館
仏壇に尻を向けたる団扇かな
能もなき教師とならんあら涼し

2018年9～10月掲載分

2018年11～12月掲載分

習志野 大慈彌 爽子

山影を青く匂はす星月夜
日を拒み月を遠ざけ烏頭
笙の音を泣かせ雨月の空匂ふ
どす黒き波に厄日の海が鳴る
母の呼ぶ声の聞こえる海の秋

藤沢 藤田 富子

冷房車降り熱風に取り巻かれ
猛暑日の針重たげは花時計
明るさも何やら侘し走馬灯
雲去りてひとすじ淡き天の川
堰止めて小川に西瓜浮かしあり

八王子 石井 蓉子

百日紅散り敷く道に移るふ季
秋近し静かな静かな日曜日
蝉時雨人待つ我に降り注ぐ
雨降るのと入道雲に聞いてみる
青空に祈る終戦記念の日

町田 小森 まさひこ

ニュータウンの朽ちし標識きりぎりす
芋の露ころころ動く小半時
芋虫やその色にしてその模様
男郎花大柄にして色白で
抜きんでし一山裾引く林檎畑

与謝蕪村

ほきほきと二もと手折る黄菊かな
うつくしや野分のあとのたうがらし
山は暮れて野は黄昏の薄かな
月天心貧しき町を通りけり
さればこそ賢者は富まず敗荷